



**令和8年度 学校推薦型選抜**  
**(きのくに教員希望枠) (地域【紀南】推薦枠)**

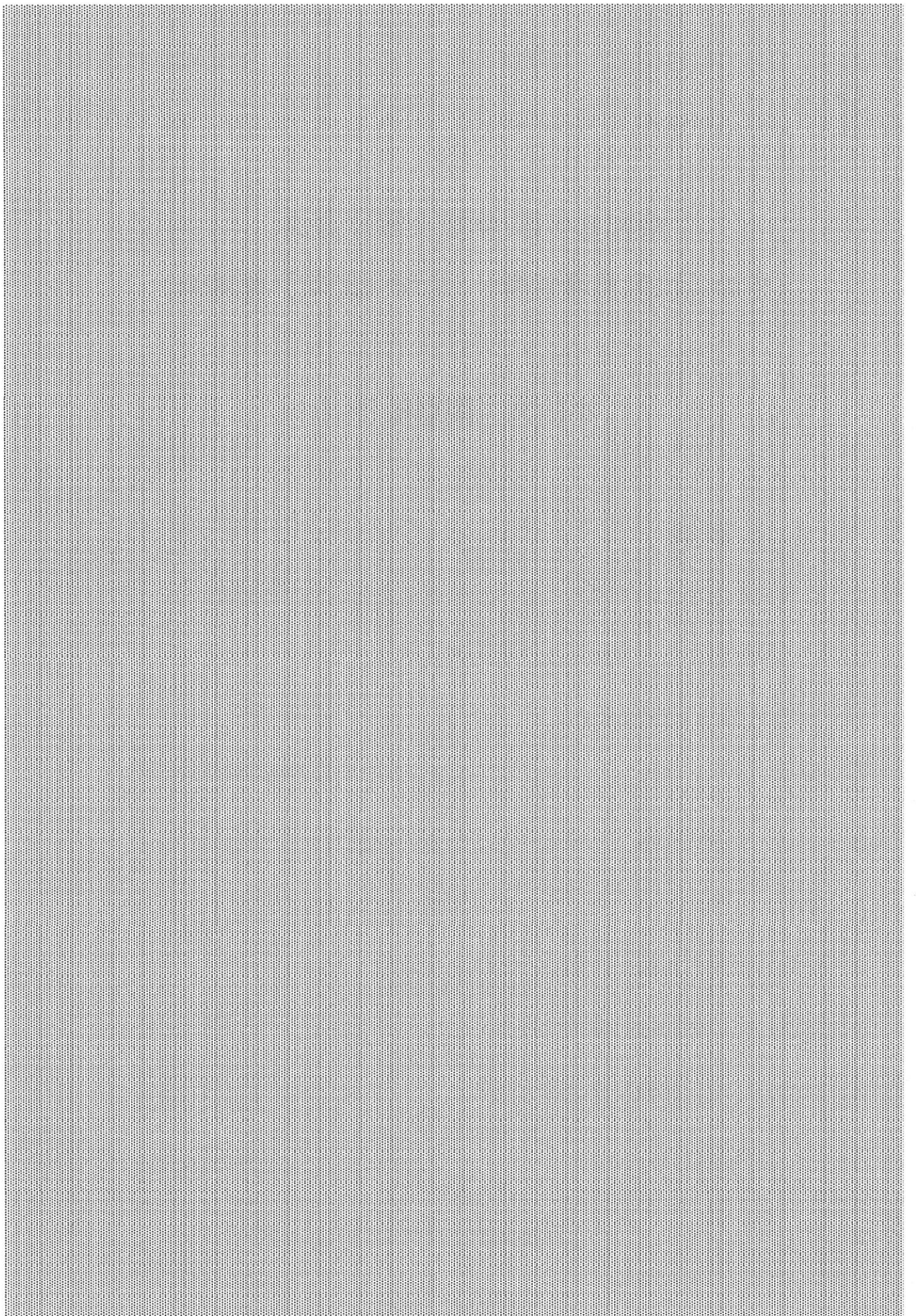
**小論文 問題冊子**

**注意事項**

1. 監督者の指示があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。
2. この問題冊子は、次の募集区分の通りである。

「学校教育教員養成課程」

3. 落丁、乱丁及び印刷不鮮明なものがあれば、すぐに申し出ること。
4. すべての解答用紙に必ず本学の受験番号を記入すること。
5. 解答は、問題番号に対応する解答用紙に記入すること。
6. 記入した解答用紙は、裏返して机の上に置くこと。
7. 解答用紙の中の※の欄には記入してはいけない。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。



次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

---

ビーチで意識が朦朧<sup>もうろう</sup>としている若者を数名の大人が介抱している様子がスクリーンに映し出される。私（下地）が最近、会社のAED研修の一環で見た映像の一部だ。実際に心肺停止になった人に対して、ビーチにたまたま居合わせた人々（＝バイスタンダー）が、大きな声でその若者に話しかけ、周囲に通報とAEDの依頼をし、胸骨圧迫と人工呼吸を適切に繰り返す。AEDが到着し手順に従って電気ショックを行う。数分後に若者の呼吸が復活し、その後救急隊員も駆けつけた――。

心肺停止状態の若者は、目が半開きのまま、手や腕は無意識の状態の上に横に動き、体は太陽を向きながらぐったりと横たわっている。この状態の若者に対して、周囲にいた人々は誰も、「その程度で気にしすぎだよ」「こうなったのはあなたのほうにも原因があるよ」「いやなことばかりにフォーカスしないで、天気やスポーツなど楽しい話題にフォーカスしなよ」とは、決して言わない。言うはずがないのだ。もし何かしら声をかけるのであれば、何よりもまず、「大丈夫ですか？」となるだろう。

しかし、差別やマイクロアグレッション（＝偏見に基づく日常のちょっとした言動、悪意のない差別的な言動等）が、人の心に、尊厳を奪いそして時に命を奪うことにすらなりかねないような深い傷をつけるとき、周囲が一言「大丈夫ですか？」と声をかけることがどれだけあるだろうか。その代わりに、「気にしすぎだよ」「もっと大変な人もいる」「あなたは恵まれている」「ほかの幸せなことにフォーカスすべき」という言葉がこんなにも多く選ばれてしまうのはなぜだろうか。もしくは無言のうちに通り過ぎられてしまうのはなぜだろうか。本稿で、私たちが問いかけたいのは、「体の傷つき」と「心の傷つき」に対する反応の違いであり、「自分の心の痛み」と「他者の心の痛み」に対する感度の違いについてだ。他者の体が傷つき、血が出ている映像を見ただけで、私たちの多くは顔をしかめ、体を固くし、その痛みになんらかの共感を示すことが多い。その一方で、言葉や態度によってつけられた心の傷に対しての共感性はどうだろうか。目には見えない心の傷つきと痛みに対しては、想像力、そして少しの知識が何かしらの行動の源になりえるのかもしれない。

人はみな、傷つけ傷つけられながらこの社会の中を生きている。社会的な差別における加害者と被害者は、別の体に存在するだけでなく、一人の人間の中に共存することがある。私とあなたの関係において、私は被害者かもしれないけれど、他の他者との出会いの中で、私が加害者であったことも間違いなくあったのだ。そのような共犯性を抱えながらも、人が人の言葉や態度の暴力によって傷つくことを少しでも減らせるように。その願いとともに、本稿では、「バイスタンダー（たまたま居合わせた傍観者）」について、特に日本で「ハーフ」や「ミックス」と呼ばれる、人種・民族的に複数のルーツがある人々に焦点を当てながら検討していきたい。

(出典：市川ヴィヴェカ・下地ローレンス吉孝「バイスタンダー（傍観者）からウィズネス（共にある目撃者）へ—複数ルーツの人々への差別にどう向き合うか—」『現代思想』青土社、2025年7月号、109-110ページ、一部改変)

問 1 筆者たちが、冒頭にビーチの若者の事例を挙げたのはなぜか。本文に則して、200字程度で説明しなさい。

問 2 下線部について、「社会的な差別における加害者と被害者は、別の体に存在するだけでなく、一人の人間の中に共存することがある」とは、どういうことか。具体例を挙げて説明しなさい。そのうえで、「人が人の言葉や態度の暴力によって傷つくことを少しでも減らせるように」、教育は何ができるか。全体で400字程度で述べなさい。人種・民族の問題に限りません。

次の文章は、伊藤公一朗『データ分析の力 因果関係に迫る思考法』の一部で、データから因果関係を導くことの難しさについて具体例を挙げながら説明している部分です。これを読んで、後の問いに答えなさい。(なお、設問の都合で例2は省略しています。)

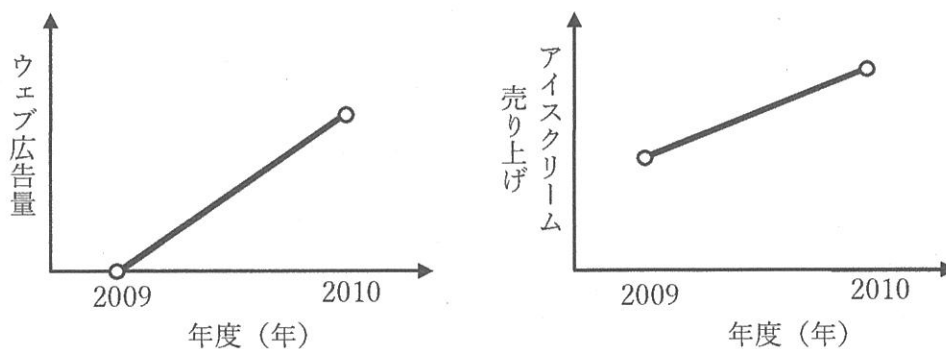
### 例1：広告の影響でアイスクリームの売り上げが伸びた？

あなたはアイスクリームを売る企業のマーケティング部に所属しています。現在社内では、ウェブサイト上で広告を表示することによって今年夏のアイスクリームの売り上げを伸ばすことができないか、ということが検討されています。あなたは上司から、広告を出すと売り上げがどれだけ伸びるのかデータ分析をしてほしいと頼まれました。

過去のデータを見てみると、次のことがわかりました。

2010年にあなたの会社では、あるアイスクリーム商品についてのウェブ広告を出しました。すると、広告を出さなかった2009年と比較して、2010年の売り上げは40%上がっていました。そのデータの動きをグラフにしたのが図表1-1です。

図表1-1 広告の影響でアイスクリームの売り上げが伸びた？



この図では、広告を出した影響で売り上げが伸びたように見えます。そのため、あなたは上司に対し以下のような報告をしました。

「この図を見ていただくとわかるように、広告を出した影響により2010年の売り上げは2009年に比べて40%上がった、ということが分析からわかりまし

た」

さてここで、なぜあなたの結論が間違っている可能性があるのか考えてみてください。どんな可能性が考えられますか？

ここでの問題は、

「広告を出した → 広告の影響で売り上げが40%伸びた」

という広告から売り上げへの因果関係（英語では causal relationship、もしくは causality と呼びます）が、あなたのデータ分析結果から導けるかどうかです。

例えば、2010年の夏が2009年の夏よりも猛暑だった場合はどうでしょうか？

実際に日本では2009年は比較的冷夏で、2010年夏は猛暑でした。その場合、40%の売り上げ増というのは、広告の影響ではなく、単に気温が高くなったために消費者がアイスクリームを求めたから、という可能性はないでしょうか？

他にも様々な理由が考えられます。

例えば、日本では2008年の世界金融危機以降、消費が冷え込みましたが、2010年あたりから少しずつ消費が上向きになりました。その場合、40%の売り上げ増は広告の効果ではなく、単に経済が全体的に良くなって消費者がお財布の紐を緩め始めたからだった、という可能性はないでしょうか？

## 例2（省略）

### 例3：海外留学をすると就職しやすくなる？

同じようなデータ分析の問題を、教育の例を使って見てみましょう。

先日、以下の新聞記事を目にしました。

「海外留学に力を入れているある大学の調査では、留学を経験した学生が、留学を経験しなかった学生よりも就職率が高いことがわかった。このデータ分析の結果から、留学経験は就職率を向上させるのであると大学は報告している」

留学を経験した学生が、留学を経験しなかった学生よりも就職率が高かったという記事の前半部分は、データが示している事実なのだと思います。しかし、その結果から、

「留学を経験する → 就職率が上がる」

という因果関係を導くことはできるでしょうか？

(出典：伊藤公一朗「なぜデータから因果関係を導くのは難しいのか」『データ分析の力 因果関係に迫る思考法』光文社新書、2017年、28-35ページ、一部改変)

問 1 例 3 において、「留学を経験した学生が、留学を経験しなかった学生よりも就職率が高かった」というデータ分析の結果から「留学を経験する→就職率が上がる」という因果関係を導くことはできるかどうか、例 1 を参考にあなたの考えを 300 字程度で述べなさい。

問 2 社会において、単なる相関関係があたかも因果関係であるかのように主張されていることがよくあります。因果関係を見誤ることはなぜ問題か、あなたの考えを 300 字程度で述べなさい。